

NEZASU

教育研究所ニュースレター №18 1996年6月

発行：(財)神奈川県高等学校教育会館・教育研究所 〒220 横浜市西区藤棚町2-197 電話：045(231)2546



「沖縄よがんばれ、神奈川から 応援しているから」への疑問

高嶋伸欣

3Kの米軍基地を押しつける身勝手さ

昨年10月21日に沖縄で開催された、米兵による暴行事件への抗議県民総決起集会の様子は、地元はもちろん全国他府県でも大きく報道され、話題となった。集会には他府県からも多数の参加者があった。けれども、それらの参加者の言動が沖縄の人々の心を傷つけているケースも少なくなかつた。当日の集会の様子を詳しく伝えていた地元紙の写真の中に、東京のある市議会議員のプラカードがあった。それには「沖縄よ負けるな、東京から応援にきたぞ」と大書されていた。

米兵犯罪や基地公害、土地強奪に苦しめられてきた沖縄の人々が問題提起し続けてきたのは、なぜ沖縄だけがこのような理不尽な目にあわされるのかということだった。復帰後も、東京や神奈川など「本土（他府県）」の米軍基地が縮小され、返還されても、その機能や部隊が沖縄へ移されている事実に注目することもないままでいる他府県の人々。米軍専用施設の75%が沖縄に集中しているのは、いわば3Kに該当するそうした施設が、他府県からていよく追い払われ、沖縄に移された

結果といえなくもない。その一方で、自分たちの日常生活の面では基地問題はほぼ解消できたと思い込んでいる他府県の人々。そうでなければ、このようなプラカードを掲げられるはずがないではないかと沖縄の多くの人々は受けとめた。けれどもそれを今、声を大にして言えばせっかくの全国的な運動の盛り上がりに水を差すことになる。じっとがまんするしかないのですよ、という声を私はあちこちで聞いた。

沖縄に3Kの米軍基地を集中的に押しつけている他府県の身勝手さに対する沖縄の人々の怒りは、大田知事の言動にも示されている。知事が軍用地強制使用のための代理署名拒否を表明したのに対し、中央からは次々と説得のために政府幹部が派遣された。あるいは首相との会見のために、知事が東京に呼ばれた。こうした試みはすべて失敗に終った。知事が「それならば、あなたがた政治家の出身選挙区に米軍基地の一つでも引き取りますと言ってくれるのならまだしも、それすらどの政治家も言ってくれないですか」という意

味の指摘をしたのに対し、皆おし黙るしかなかつたという。

大田知事の『醜い日本人』との出会い

私が大田昌秀氏の他府県人への問題提起に初めて触れたのは30年近く前のことだった。教員になりたての1969年の春休み、職場の先輩教員から「沖縄に学べ」と言わされて、復帰前の沖縄に渡った。以後連続して沖縄に通う間に手にした文献の中に、大田氏の著書『醜い日本人』(サイマル出版会、1969年)があった。薩摩藩による琉球支配から明治以後につながる沖縄差別、それが沖縄戦の悲劇を必然のものにしたという指摘。とりわけその過程で皇民化教育の「効果」が最大限に発揮されたという分析は、社会科担当の教員として生きようと思っていた私には衝撃だった。教員の仕事というのは、一つ誤れば生徒たちやその家族の生活をここまで傷つけてしまうのかと思い知らされた。でも今さら別の職業に逃げるのではなく、誰かがやらなければならない仕事なのだから精一杯努力するしかない、とその時覚悟を決めたように記憶している。結果として、戦前の皇民化教育の再現は何としてもくい止めなければならないという思いが鮮明になり、「教育勅語体制」を分析する授業実践や、教科書問題・「日の丸・君が代」問題へのこだわりとなっていました。「教育勅語体制」を分析する授業実践では、生徒たちから学んだことも少なくない(詳しくは拙著『教育勅語と学校教育』岩波ブックレットNO.174 '90年)

大田氏の著書『醜い日本人』からは、もう一つ強烈な衝撃を受けた。それは、こうした長年の沖縄差別の結果として必要以上の戦禍に苦しめられた沖縄を、戦後の日本はさらに踏みつけにして独立と経済的繁栄を得たことになるという指摘だった。講和条約で、沖縄だけを米軍占領下の無国籍、無権利のままに放置したことを忘れ、復帰が具体化し始めると経済不安をあおる。それが当時の日

こうした知事の発言を、沖縄の人々は拍手かっさいの思いで受け止めている。そして私も。

代理署名を拒否した大田知事

本の保守長期政権であると同時に「そうした事態をも黙認して、ろくに気にもとめないのが誰であろう、本土の多くの知識人であり一般国民ではないだろうか」と大田氏は言う。だから「醜い日本人」なのだと。

私は高校時代はサッカー、大学では地理学を専攻しながら全国を歩き回るワンダーフォーゲル活動に熱中し、典型的なノンポリ族だった。高三の時の安保騒ぎにも我関せずだった。それでも人権・人格を尊重すべきだという意識は鮮明だった。今にして思えば中学時代に社会科を学ばせてくれた先生たちは、民間教育団体の初期の活動の中心メンバーたちだった。知らず知らずに人権意識が芽ばえ、それがワンゲルで全国各地のへき地、開拓地の忘れられかけている人たちと接していく中で、きたえられたように思われる。中学時代に教えを受けた先生たちは10年程前に定年で次々と退職された。そのあとを、きちんと継いでいかなければと、今思う。

ともあれ、大田氏の「醜い日本人」という指摘に私も該当していると思った時、それを正面から受け止めて対処していくことが社会科の教師としての責任だと自覚した。以来、それを社会科、とりわけ地理の学習の中などのように具体化していくか、仲間と共に試行錯誤を繰り返しながら、授業実践を続けてきた。そこから東南アジアに対する差別的民族観へのこだわりが生まれ、教科書問題への回帰ともなった。



沖縄タイムス 1995.10.23

大田氏のこうした指摘が、社会科教師としての私のあり方に大きく影響したという認識は今も鮮

明にある。数年前、那覇市で日教組主催の平和教育の研究集会が企画され、大田氏の記念講演が予

告された。私も参加させてもらった。前出の指摘を大田氏が明確に再度するものという期待が大きかった。けれど、講演ではその点にほとんど触れられなかつた。質疑の中でも言を左右させて歯切れの悪い説明しかなかつた。後に考えてみると、大田氏が知事選出馬の要請を受け始めている頃のことだった。やがて大田氏は知事選に出馬し、当選する。保守の西銘氏から知事を取り返した革新側が大田氏に寄せた期待は大きかった。しかし、それは就任直後に、軍用地強制使用のための公告縦覧代行に知事が応じたことで、大きな失望に変わつた。国からの補助金に依存している県政、県経済の状況を直視した大田氏の苦汁の決断だった。

こうした前回のいきさつがあつただけに、今回も大田氏は署名するのではないかというのが、多

くの人々の予想だった。ところが知事は署名を拒否した。前回との違い、それは国が前回の代行の際にした「基地縮小に向けて最善の努力をする」という約束を何も果たさなかつたという怒りだつた。前出の政府からの説得役たちは、この点についても指摘されると、返す言葉がなかつたという。縮小どころか、他府県の基地を閉鎖したのを沖縄に移すことまでやってのけていたのだから、反論などできるはずがなかつた。

支援者たちからの批判にさらされながら迎えた二度目の代行要請に対し、大田氏は拒否の態度を表明した。そこに「醜い日本人」の手を借りずに、自分たちの力で日本政府に正面から迫れる条件作りを根気よく続けてきた沖縄の強さがあるように、私には思える。

自分たちの地域の問題にどう取り組むのか

沖縄は、他府県の人から「がんばれ」と言われてがんばっているのではないし、そのように言われることを望んではない。自分たち自身の権利の侵害には自分たちで対処するのが当然だし、そうすることで無国籍・無権利状態から権利の章典「日本国憲法」を自力で獲得した実績もある。他府県の人々が沖縄と連帯しようとするのであれば、自分たちの地域の問題に取り組んできているのかどうかが、まず問われる。それも3Kに当たるものと沖縄などに押しつけることで、地元の問題は取りあえず解消したというレベルでよしとしてないかどうか。

米軍基地の数では沖縄につぐ神奈川県の場合、基地を沖縄に押しつけているのではないかという

面の一方で、基地の少ない県に対しては沖縄と同じ立場であるとも考えられる。神奈川県の高校から沖縄へ修学旅行に行く動きがふくらみ続けている。沖縄戦の追体験と共に、神奈川とのかかわりの深い基地問題をどのように学習していくのか。「沖縄より神奈川の方がました。よかつた」は論外としても、「がんばれ、神奈川からも応援しているから」のレベルをどう乗り越えるのか。

修学旅行への取組みと並行して、日常の学習活動のためにも、教師の側の広い沖縄認識が必要ではないだろうか。沖縄の大学に移り、「沖縄の皆さん、仲間に入れていただけませんか」と言って2ヶ月目、改めてこうした思いを強くしている。

(たかしま のぶよし 琉球大学教授)

神奈川の県立高校で沖縄修学旅行を予定している学校数

96 年 度	30
97 年 度	27

1996.6.1 現在
神高教平和運動推進委員会調べ

遠足での横須賀基地の見学

本校ではこれまで平和学習の一環として、広島修学旅行を実施してきた。二年の春の遠足は、そのための事前学習として「第五福竜丸」の見学をはじめとする、東京都内の平和関連施設を回るフィールドワークという形で行ってきた。

本年度から、修学旅行の行先が「沖縄」になった。遠足も、沖縄で基地問題を学ぶ前に地元神奈川の基地の実態を学習しようということになった。当日は90人乗りの船をチャーターし、2クラスづつ4回に分かれ、海から横須賀基地見学を行つた。幸運(?)にもカールビンソンの入港とぶつかり、その巨大な姿を間近で見学することができた。

沖縄へ修学旅行で行く学校がふえた。「沖縄の問題」は沖縄だけにあるのではない。自分の足元にある問題を理解することが、真の沖縄理解につながっていくのではないだろうか?

(県立百合丘高校 山根俊彦)

資料紹介 1 高校生が語る沖縄の“今”

——少女暴行事件に抗議する県民総決起大会における高校生代表（普天間高校3年仲村清子さん）挨拶——

もう、ヘリコプターの音はうんざりです。私はごく普通の高校三年生です。たいした事は言えないと思いますが、ただ思ったことを素直に伝えますので聞いてください。私はこの事件を初めて知った時、これはどういうこと、理解できない、こんなことが起こっていいものかとやりきれない気持ちで胸がいっぱいになりました。この事件がこのように大きく取り上げられ、9月26日普天間小学校で、10月5日には普天間高校で抗議大会が開かれました。高校生の関心も強く、大会に参加したり、大会の様子を見守っていた生徒も少なくありません。そんな中、私はこの事件について友人たちと話をするうちに、疑問に思ったことがあります。米兵に対する怒りはもちろんですが、被害者の少女の心を犠牲にしてまで抗議すべきだったのだろうか、彼女のプライバシーはどうなるのだろうかと。その気持ちちは今でも変わりません。しかし、今、少女とその家族の勇気ある決意によってこの事件が公にされ、歴史の大きな渦となっているのは事実なのです。彼女の苦しみ、彼女の心を無駄にするわけにはいきません。私がここに立って意見を言うことによって、少しでも何かが変われば、彼女の心が軽くなるかもしれない、そう思い、今ここに立っています。

沖縄で米兵による犯罪を過去までさかのぼると凶悪犯罪の多さに驚きます。戦後五十年、いまだに米兵による犯罪は起こっているのです。このままでいいんでしょうか。どうしてこれまでの事件が本土に無視されてきたのかが私には分かりません。まして、加害者の米兵が罪に相当する罰を受けていない事には、本当に腹が立ちます。米軍内に拘束されているはずの容疑者が米国に逃亡してしまうなんてこともあります。そんなことがあるから今、沖縄の人々が日米地位協定に反発するのは当然だと思います。それにこの事件の容疑者のような人間をつくり出してしまったことは、沖縄に在住する「フェンスの中の人々」、軍事基地内の人々すべての責任だと思います。基地が沖縄に来てからずっと犯罪は繰り返されてきました。基地があるゆえの苦悩から早く私たちを解放してください。今の沖縄はだれのものでもなく、沖縄の人々のものなのです。

私が通った普天間中学校は、運動場のすぐそばに米軍の基地があります。普天間第二小学校はフェンス越しに米軍

の基地があります。普天間基地の周りには七つの小学校と四つの中学校、三つの高校、一つの養護学校、二つの大学があります。ニュースで爆撃機の墜落事故を知るといつも胸が騒ぎます。私の家からは、米軍のヘリコプターが滑走路においてゆく姿が見えます。それはまるで、街の中に突っ込んでいくように見えるのです。機体に刻まれた文字が見えるほど低空飛行、それによる騒音。私たちはいつ飛行機が落ちてくるか分からず、そんな所で学んでいます。私は今まで基地があることを仕様がないことだと受け止めてきました。しかし、今、私たち若い世代も、あたり前だったこの基地の存在の価値を見返しています。学校でも意外な人が、この事件についての思いを語り、みんなをびっくりさせました。それぞれ口にはしなかったけれども、基地への不満が胸の奥にあったということの表れだと思います。今日、普天間高校の生徒会は、バスの無料券を印刷して全校生徒に配り「みんなで行こう、考えよう」とこの大会への参加を呼び掛けていました。浦添高校の生徒会でも同じことが行われたそうです。そして今、ここにはたくさんの高校生、大学生が集まっています。若い世代もこの問題について真剣に考え始めているのです。今、このような痛ましい事件が起こったことで、沖縄は全国に訴え掛けています。決してあきらめてはいけないと思います。私たちがここであきらめてしまうことは、次の悲しい出来事を生み出してしまうからです。いつまでも米兵におびえ、事故におびえ、危機にさらされながら生活を続けていくのは、私は嫌です。未来の自分の子供たちにもこんな生活はさせたくありません。私たち、子供、女性に犠牲を強いるのはもうやめてください。

私は戦争が嫌いです。人を殺すための道具が自分の身の周りにあるのは嫌です。次の世代を担う私たち高校生や大学生、若者の一人ひとりが、嫌なことを口に出して行動していくことが大事だと思います。若い世代に新しい沖縄をスタートさせてほしい。沖縄を本当の意味で平和な島にしてほしいと願います。そのためにも歩一歩行動していきたい。私たちに静かな沖縄を返してください。軍隊のない、悲劇のない、平和な島を返してください。

(「沖縄タイムス」1995年10月22日より)

資料紹介 2 沖縄の“環境問題”を考えるために-----

『環境読本 消えゆく沖縄の山・川・海』(沖縄県教育文化資料センター環境・公害教育研究委員会編 1996.1沖縄時事出版社発行)は、現場の高校教員を中心となって、山・川・海・水・基地・リゾート・ゴミ問題を大きなテーマに、それぞれの専門家を執筆者に迎え、平易な環境問題入門書として編んだものである。全体に沖縄の自然是沖縄の人々の心の支えであり、沖縄の文化の母である、破壊されゆく自然をどうにかしなくてはという熱い思いが伝わってくる。カラー写真やイラストも多く、生徒向けテキストとしても工夫された構成である。巻末の参考文献一覧等も有用で、単なる入門書に止まらない“今の沖縄”に迫る充実した内容である。沖縄の自然からのメッセージを神奈川でどう受け止めるのか…。



昨年の秋以来基地問題で揺れる沖縄。

修学旅行で沖縄を訪れる学校が増えていく中で、今神奈川にいる私たちが沖縄にどう向き合えば良いのかを考えてみたいと思い、沖縄に移られたばかりの高嶋さんに寄稿をお願いしました。